

京都大学	博士（文学）	氏名	竹部 春樹
論文題目	John Updike at Work: The Art of Revision in His Early Fiction		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、米国の作家ジョン・アップダイク（John Updike, 1932-2009）がキャリア初期に著した小説作品を扱い、草稿段階での推敲や出版後の改訂過程を丹念に精査することで、広義の執筆過程の諸相を記述するとともに、それらを具体的な作品分析に応用することを目的とする。これまでアップダイクは精妙巧緻な文章で知られてきた一方で、いわゆる美文家・名文家といった形式的かつ生ぬるい評価にとどまる傾向にあった。ところが、創作のあらゆる段階で頻繁に施された書き直しを検討すると、彼の作品が繊細きわまる技巧の上に成立している事実があらわになる。そこで、本論文ではアーカイヴ調査も援用しながら、これまでにほとんど検討されていないアップダイクの「改訂の技法」を客観的に評価することを試みる。</p> <p>本論文は、序論・本論四章・結論・付録ならびに引用文献表から構成されている。序論においては、まずアップダイクの創作観における改訂作業の重要性が概観される。アップダイクは自身の代表作である「ウサギ四部作」をもとにした『ラビット・アングストローム（<i>Rabbit Angstrom</i>）』（1995年）を晩年になってから出版したが、その際に、四つの長篇小説それぞれに細かな改訂を施した。例として、各作品の冒頭部分での大文字使用や、作者の意図にない誤植と意図した「誤植」の混在などについて、書簡資料を用いて議論する。アップダイク本人が「学者や植字工以外の人間にとっては目に見えない」だろうと述べていたこれらの修正点は、彼の作品が（タイポグラフィなどの細部にいたるまで）徹底的な精読を要求することを示唆している。</p> <p>このような微細な改訂はアップダイクの仕事において例外的なものではなかった。それどころか、この作家はキャリア全体を通じて大小さまざまな変更をみずからのテキストに対して施していた。そのような例をいくつか確認したあと、本論文の理論的な枠組みについて概略が述べられる。近代作家のテキスト研究においては、おおまかにテキスト批評（<i>textual criticism</i>）と生成批評（<i>genetic criticism</i>）の二つのアプローチが可能だが、この論文では両者を折衷的に用いることになる。というのも、これまでのアップダイク研究においてはテーマ批評が中心的な役割を果たしてきたため、テキスト研究としての方法論的な先鋭化を目指すよりも、むしろテキストそのものの精査がアップダイクを理解する上でいかに豊穡な結果をもたらすのかを実践してみせることのほうが重要だと考えるからである。</p> <p>続いて、アップダイクの改訂作業が他の英米作家のものとは比べてどのように異なる</p>			

のかを、特にヘンリー・ジェイムズ (Henry James) とマーティン・エイミス (Martin Amis) を参照点として論じる。ジェイムズのニューヨーク版における改訂が一般に文体の複雑化をもたらしたのに対し、アップダイクの書き直しはさまざまなレベルでの「明快さ」を企図したものであった。この点ではエイミスによる『時の矢 (Time's Arrow)』出版後の書き直しに通ずるものがあるが、他方でアップダイクの改訂のほうが、より微に入り細をうがった作業であったとすることができる。

次いで、アップダイク自身が他の作家の改訂作業をいかに理解していたのかという点に関連して、ソール・ベロー (Saul Bellow) とウラジーミル・ナボコフ (Vladimir Nabokov) についてのアップダイクによるエッセイを読解する。いずれもアップダイク本人の改訂がテーマや文体、さらには作家自身にとっての実存的な意味合いにまで関連する幅広い射程を持った営為であったことを示唆している。

第一章「『走れウサギ』の漸進的改訂」では、アップダイクの代表作とされる『走れウサギ (Rabbit, Run)』(1960年)の改訂履歴を詳細に記述・分析する。

1960年、『走れウサギ』の出版に際し、版元であるクノップフ社は性描写が法的な問題を引き起こす可能性があるとして作品の部分的な修正を要求した。一度はこれに応じたアップダイクはしかし、1964年、英国ペンギン社からペーパーバック版が出版されるにあたり、修正部分を元に戻し、次いでそれを基にしたさらなる改訂版を1970年にクノップフ社から出版した。その後、アップダイクはシリーズを書き連ね、1995年には四部作の合本版である『ラビット・アングストローム』が登場した。したがって『走れウサギ』のテキストはおおざっぱにいて四種類(1960年版、1964年版、1970年版、1995年版)が存在することになる。

これらのうち、最初の三つのテキストの異同についてはランドル・H・ウォールドロン (Randall H. Waldron) による1984年の論文が存在するが、本章ではこの研究を批判的に再検討するとともに、先行研究によってカバーされていない1995年版における作者の改訂をアップダイク研究の中に文脈づける。

95年版テキストにおける興味深い改訂の例としては次のようなものがある。初版テキストにおいて、主人公の言いよどみを表現するために用いられていた(一見すると不要な)コンマが、1964年版においては出版社側のミスにより消滅した。これを修正するために、アップダイクは95年版において、コンマだけでなくその場面における主人公の内面をも書き下した。このエピソードはアップダイクの文章が句読点ひとつにいたるまで、細心の注意をもって彫琢されていることを物語っている。

1995年版テキストにおいては、とりわけエピグラフに掲げられたパスカル『パンセ』の引用の文言を踏まえた語句が追加されているなど、『パンセ』が作品のテーマに沿ってより大きな意味を担うべく改訂が施されている。関連して興味深いのが、アップダイクが95年版テキストの一節において、同一の単語を同じ行で繰り返すという

(一見すると不可解な) 改訂を施した点である。この箇所はエピグラフと呼応するとともに、女性登場人物の視点から男性主人公の身勝手さを強調するものであり、『走れウサギ』という作品に対して向けられてきたフェミニスト批評家からの批判への応答だと解釈できる。このように、アップダイクは改訂に際して、それまでの版における不備だけでなく、テーマ上重要な要素に対しても、さりげない、しかし効果的な修正を施したのである。

第二章「『メイプル夫妻の物語』と「殺す」における男女の視点」においては、語りの視点の取り扱い方について、アーカイヴ調査の結果も援用しながら論じる。

アップダイクは(とりわけ初期作品において)女性視点を採用することが少なく、その事実は彼のミソジニーを説明する材料として利用されてきた。ところが、たしかに分量としては少ないものの、キャリア初期の作品においてさえ、アップダイクが女性視点を作品に取り入れようとした形跡ははっきりと認められる。そして、キャリア後期に至っては、女性登場人物を主人公(または主要な視点人物)として採用した作品が数多く発表されることになる。この間の転換点として重要なのが、短篇「殺す(“Killing”)」(1975年執筆、1982年発表)である。

この短篇において、アップダイクは代名詞usを利用することで、女性主人公の視点からみた結婚生活の終焉を巧みに描いている。ポイントとなるのは、一人称複数の代名詞の両義性、すなわち目の前の人物を含む場合と含まない場合のいずれをも意味するという性質である。後者の用法を用いて、まずは結婚生活の破綻しかかった夫婦間の意見の不一致がうまく表現される。しかるに短篇の結末部分において、アップダイクは同じ代名詞を前者として転用することで、夫婦間の意見の一致(離婚への合意)を皮肉を込めて描き出している(アップダイクがこのような作意を持っていたらしいことはアーカイヴ調査からも確認できる)。この読解は、短篇の名手としての作家像を例証するにとどまらず、作家がキャリア全体を通じて試みていた女性視点の使用をめぐるひとつの達成であったと考える。

最後に、二人の女性が主要登場人物となる後期の長篇『わが顔を尋ねもとめよ(Seek My Face)』(2002年)における一人称複数の使い方を確認する。視点人物である老画家は、インタビューのためにやってきた若いジャーナリストの厚かましさに反感を抱き、物語の前半においてusを排他的に用いる。ところが、物語が進展するにしたがって二人は和解してゆき、最終的には同じ代名詞が女性一般を意味する形で使用される。それゆえ、代名詞の技巧と女性視点の描き方は、アップダイクのキャリア全体を通じて探求し続けられたテーマだと結論づけた。

第三章「『ベック』と「アイルランドの青髯」におけるナボコフからの影響」においては、ロシア生まれの作家ウラジーミル・ナボコフがアップダイクに対して与えた影響について、アップダイクの自作改訂に注目しながら議論する。

アップダイクがナボコフへの敬意を公言していたことから、このトピックはしばしば批評家たちの俎上に載せられてきたが、先行する批評の関心は、とりわけ『日曜日だけの一か月 (A Month of Sundays)』(1974年)と『クーデタ (The Coup)』(1978年)の二作品に集中している。ところが、ナボコフからの影響のもっとも初期の例は、アップダイクが1960年代に執筆し1970年に単行本として出版した『ベック氏の奇妙な旅と女性遍歴 (Bech: A Book)』において観察できる。この背景には、アップダイクが60年代に書評を執筆するためにナボコフ作品を集中的に読み直していたという伝記的事実があると思われる。

『ベック』におけるナボコフからの影響として第一に挙げられるのは、文体上のテクニクである。アップダイクが『ベック』を出版する際にナボコフの『プニン (Pnin)』を念頭に置いていたという事実を踏まえ、メタフィクション的な語り口や英熟語のもじりなどについて、二作品を比較する。

しかるに、『ベック』と『プニン』の間には単なる技巧上の影響関係を超えた、テーマ上の類似も観察できる。すなわち、ひとはいかにして他者の内面という語りえぬものを語りうるのか、というモラル上の問題意識が共通しているのである。この点について考えるために、いずれも特異な語りの枠組みを持つこれら二作品に関して、アップダイクの改訂に注意を払いながら、語り手と主人公の関係について比較・検討する。その結果、アップダイクはナボコフから「技巧 (art)」だけではなく「情 (heart)」もまた学びとったのだと結論した。

ここまでの議論では、アップダイクが1970年代に出版した作品群を集中的に扱っている。しかし、それ以降にもナボコフからの影響は見られ、とりわけナボコフ的なテクニクをより複雑な形で用いている以下の例が重要である。

「アイルランドの青髯 (“Bluebeard in Ireland”）」(1993年)という短篇では、結末ちかくにおいてナボコフの『淡い焔 (Pale Fire)』が間接的に引用される。『淡い焔』という小説を構成するのは、同じく「淡い焔」と題する長編詩とそれに付されたコメンタリーだが、この詩はヒロイック・カプレットで書かれているにもかかわらず、全体で999行しかない。すなわち、一見すると第999行が押韻の規則から外れているかのように見える。ところが実際には、第999行目と第1行目が押韻しており、この詩は全体として円環構造をなしていることがわかる。これを踏まえて「青髯」を読み直すと、こちらでも結末のセリフと冒頭のセリフとが自然に繋がるように構成されていることに気づく。つまり『淡い焔』への言及は、この短篇の円環構造に対する一種の解説として機能していることになる。

しかしながら、問題となる「引用」は実のところ『淡い焔』のテキスト中には見当たらず、ナボコフ晩年の作である『見てごらん道化師を!』に登場する。『道化師』の主人公であるヴァジムなる作家は、作者ナボコフの自己パロディとも呼べる存在で

あり、とりわけ重要な点として、ヴァジムの作品として紹介される小説は、いずれもナボコフ自身の作品への歪んだ言及となっている。「歪んだ間テクスト性」とでも呼ぶべきこの仕掛けは、『道化師』の語りに対して特有の「信頼できなさ」を付与している。このようなトリックはナボコフの好んだ手法だが、アップダイクが「青髯」に埋め込んだのも類似の仕掛けであると解釈でき、したがってナボコフ的なテクニクを自家薬籠中のものとした結果なのだと考えられる。

第四章「『オーリンガー・ストーリーズ』における作者としての自己保存」では、アップダイクが『初期短篇集 1953-1977』 (*The Early Stories: 1953-1975*) (2003年) において、いくつかの自伝的短編に対して施した改訂を精査し、それにもとづいて新しい作品解釈を提案するとともに、アップダイクが頻繁におこなった自作改訂の意味の一端を提示しようと試みる。

まず第一節では、短編「鳩の羽根 (“Pigeon Feathers”）」を一種の芸術家小説として再検討し、のちに作家となるデイヴィッドが自分自身の芸術的感覚を通じて実存的不安を（さしあたり）解消するという筋書きが、晩年のアップダイクの改訂によってより明確な形で表現されていることを確認する。

続く第二節では、続編にあたる短篇「踏み固められた土、教会通い、死にかけの猫、下取りに出した車 (“Packed Dirt, Churchgoing, a Dying Cat, a Traded Car”）」において、成長した主人公がやはり死や忘却への不安を抱えながらも、それらを作家としての想像力で乗り越えようとする過程を分析する。このような読み方は後年の改訂によって支持されるだけでなく、アップダイクがその改訂作業と同時期に、テーマ的に共鳴するデイヴィッドの物語「エリザンとの散歩 (“The Walk with Elizanne”）」を執筆した事実からも裏づけられる。とりわけ、改定版の「踏み固められた土」と「散歩」に共通して用いられているキーフレーズは、「作品を通じた死後の生」あるいは「テクストへの自己保存」という観念に対するアップダイクの思い入れを強く示唆している。

最終節では「踏み固められた土」執筆時のアップダイクが創作上のスランプに陥っていたこと、またそれにより「テクストによる死後の生」を危ぶんでいたことを指摘し、この短編が（主人公にとってだけでなく）作者アップダイクにとっても自己救済的な側面を持っていたことを、やはり晩年の改訂に基づいて主張する。加えて、自身を代表する作品とさえ述べていた自伝的な短編群に対して、その細部を作者自らの自伝的事実に合致させるべく改訂を施していることから、問題の作品群に対する一連の改訂は「自己保存」という問題意識により（複数のレベルにおいて）貫かれていると結論づけた。

最後に、アップダイクにとっての執筆作業と改訂作業とが、作家本人のキリスト教信仰のみならず個人的な自意識と分かちがたく結びついていることを、後期の回想録

『自意識 (*Self-Consciousness*)』 (1984年) における改訂を通じて確認する。結局のところ、アップダイクという作家において「改訂の技法」とはすなわち「自意識の技法」にほかならないのである。

付録として、いくつかの作品における主要な改訂箇所の一覧表を収録した。

(論文審査の結果の要旨)

ジョン・アップダイク (1932-2009) は、1950年代半ばから半世紀以上にわたって旺盛な執筆活動を続け、小説、詩、評論など膨大な著作を残した20世紀アメリカ最大の文筆家の一人である。とはいえ近年では、稀代の名作家として紋切型的に称揚される一方で、その思想や作風の保守的傾向がリベラルな知識人の批判的にもなっており、そうして定着しつつある旧時代的な白人男性作家というイメージの陰で、小説家としての真価が見えにくくなっている。本論文は、アップダイク評価のそうした現状に一石を投じるべく、(1) アーカイヴ調査に基づく作家の創作および改訂プロセスの実証的解明、(2) 執筆から改訂に至る諸段階に属するテキストの精読と比較分析、という二つの作業を通じて、とりわけアップダイクの持ち味である文体と主題の緊密な照応関係に着目しつつ、作家の創作意図や技巧面での試み、ひいてはその文学観、世界観にも新たな批評的解釈の光を当てようとしたものである。

名作家としての賞賛にせよ、自己満足的なブルジョワ男性作家としての批判にせよ、従来のアップダイク評価がしばしば綿密な実証を欠いているという論者の問題意識は首肯できるものであり、以下に順を追って述べるように、この点で本論文はアップダイク研究に小さからぬ貢献をなしていると言える。このことは、本論文の核をなす各論がすでに英米のジャーナルに掲載され、アメリカのアップダイク研究者のあいだでも高い評価を得ていることから窺えよう。

まず、序論で論者は、アップダイクが作家人生を通じて機会あるごとに自作に細やかな改訂を施してきたこと、それらの改訂の多くが作品の主題や狙いを文体レベルで明確化する方向性を持つことを具体例を挙げつつ概観し、本論で扱う改訂の範囲、および分析の方法論を示したうえで、アップダイクの改訂のあり方を他作家との比較を通じて広義の自作改訂の営みの中に位置づけている。この序論はトピックが多岐にわたるためにやや散漫な印象もあるものの、アップダイクにとっての作品改訂の重要性、およびその綿密な考証が拓く批評的可能性を伝えるには十分なものと言える。

第一章は、1960年の発表以来、都合三度の改訂を経てきた代表的長編『走れウサギ』を扱っている。本章は大きく分けて、(1) 初めの二度の改訂に関する先行研究の批判的検討、(2) 従来の批評では未検証の三度目の改訂の検証、(3) 主に(2)に基づく作品の主題と技法の再解釈、という三つの試みからなる。このうち論者の本領が発揮されているのは(2)と(3)であり、パスカル『パンセ』の英訳から引いた題辭に作者が加えた微修正や、小説本体への細かな加筆修正を手掛かりに、『パンセ』の一節が本作において持つ意味を洗い直し、主人公のふるまいを相対化する女性人物の視点の重要性を解き明かしていく論考は興味深いものとなっている。

第二章は、短編集『メイプル夫妻の物語』および同時期に執筆された短編「殺す」を主に取り上げ、アーカイヴ資料を活用しつつ、その執筆、編纂、出版から改訂に至るプロセスに新たな光を当てている。本章の議論の独自性は、『メイプル夫妻の物語』とは一見無関係な短編「殺す」を、夫婦関係を語るうえでの有効な視点の用い方

を模索するアップダイクのこの時期の試みの要石として実証的かつ説得的に位置づけた点にある。一人称複数代名詞we/usが持つ、指示対象に対話の相手を含むか含まないかという両義性に着目したテキスト分析も高度な独創性を有しており、アップダイクの女性人物の描き方そのものの考究不足という難点を差し引いても、高評価に値する論考となっている。

第三章では、アップダイクに影響を与えたとされるウラジーミル・ナボコフの作品との間テキスト性が、作品改訂との関連において考察される。本章も第一章に似て、先行研究を引きつつナボコフの影響全般を再検討する章前半の考察はやや平板で、連作短編集『ベック』とナボコフ『プニン』に共通する語りの倫理の問題を扱った中盤以降の議論に比べると若干の物足りなさがあるが、しかしそうした構成上の難点をも補って余りあるのが、章を締めくくる短編「アイルランドの青髯」論である。登場人物のナボコフ作品への誤った言及を手掛かりに、アップダイクが同作に仕込んだナボコフ的トリックを鮮やかに解き明かしてみせることで、論者はナボコフの影響が従来指摘されてきた以上の深度を持つという本章の主張に確かな説得力を付与している。

第四章は、「踏み固められた土、教会通い、死にかけの猫、下取りに出した車」と「鳩の羽根」という、ともに作者の分身と思しき主人公の信仰の危機を描いた初期の二短篇を取り上げ、2003年の『初期短編集』収録の際にこれらの作品に施された改訂を精査したうえで、執筆と信仰、芸術と死後の生という、この作家を理解するうえで避けて通れない大きな問題に切りこんでいる。アップダイクの創作が信仰と深く結びついていったという指摘自体は特に斬新なものではないが、そのことを二作品の緻密な分析と改訂研究から説得的に跡づけたことには大きな価値があり、本論文中屈指の力作論考と評価できる。結論部では、アップダイクの飽くなき自作改訂の背後に、この作家ならではの「自意識」を見ているが、これは論者も自覚しているとおおり、数頁の紙幅で語りきれぬ問題ではなく、今後の研究課題を予告するものと考えらるべきだろう。

以上のように、本論文は、初期アップダイク作品の改訂の実相を明らかにしつつ、作品解釈や作家理解の面でも新たな知見をもたらすことに成功している。とはいえ、課題がないわけではない。実証的な改訂研究と作品解釈の試みを「折衷」した結果、本論文の議論は全体を通じて必ずしも方法論的な一貫性をもちえていないし、ときに「芸術家」アップダイクに肩入れしすぎる論者の姿勢は、作家や創作行為を取り巻く時代や社会の文脈への目配りを欠きがちである。とはいえ、これらの点は今後論者が克服していくべき課題でこそあれ、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年2月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。